

支那滿洲瞥見記

宮本武之輔

はしがき

此の一篇は私が工政會主催の東洋工業會議に参加して、昭和十年十月二十五日上海到着以來、上海、南京、青島、天津、北平、大連、新京、哈爾濱の順路で支那滿洲を一巡した末に、十一月十四日豆滿江を渡つて北鮮へ出るまでの、三週間の慌しい旅行の間の見聞や感想を斷片的に綴つたものである。

大正五年の夏大學の實習生として初めて滿洲に行つたのを最初として、滿洲は今度で四回目であるが、支那に就ては同じく大正五年に奉天から一寸北京を覗きに行つた程度の短い旅行をした事があるのと、大正十二年に歐羅巴へ行く

途中に上海と香港とに寄港して兩地を瞥見した事がある位のもので、支那内地の旅行は今回が初めての経験であるだけに、私に取つては様々の意味で興味の深いものがあつた。中支の晩秋は暖く、北滿の初冬は寒い。旅行の始めの上海や南京あたりでは一六、七度であつた氣温が、旅行の終りの新京や哈爾濱では零下一二、三度に下る様な氣候の激變ぶりであつた。

昔、唐の玄宗皇帝は寵姫楊貴妃に誇つて

『大唐の領土は廣い。北方で吹雪がする時でも、南の果ては綠葉が眞夏の日に薫じてゐる。道士の仙術を借らずとも都の夏に朔北の氷を呼び、冬に南國の樹の實を味ふ事も思ひのまゝだ……』

と語つたとか傳へられるが、大陸を南北に縦斷する旅行の間の此の氣候の激變ぶりよりも、更に一層深い興味を私に起させたものは、その間の風土人文の變化、別けても中支、北支、滿洲——と大別せられるそれらの地域に於ける政治的事情の鮮明なる對立的相違であつた。

當時南京では國民黨の六中全會の開會中であり、私達が南京政府を訪問した二日後には行政院長汪精衛氏が狙撃せられると云ふ様な兇變があり、更に北支では例の自治運動が正に表面化し、具體化せんとする危機を孕んでゐた。さうした時機に於て、さうした事情の下に支那を旅行した一個のリペラリストとして、私は茲に率直なる自分の感想を語りたと思ふ。

東洋工業會議

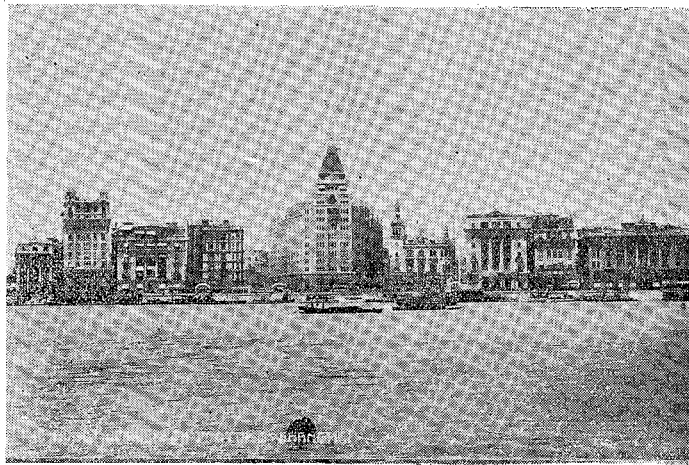
東洋工業會議は工政會の主催の下に同會理事長井上匡四郎子を主席代表とし、内務、鐵道、農林、商工、陸軍、海軍、文部の諸官廳及び滿鐵、その他民間會社から夫々代表

を參加せしめて組織した、工業技術的團體であつて、その目的は井上主席代表の聲明を借りて言へば

『日華兩國は古き文化の基礎を同じくし、同文同種、共存共榮の密接なる關係あるに拘らず、此の近年の兩國の間の政治關係、外交關係は兩國民の希望する様な圓滿なる状態に置かれてゐないのは極めて遺憾である、此の悲しむべき現状を改善する爲には兩國民が互に接觸して相互の理解を深くし、學術的提携、文化的親善に努力する事が最も緊要である……』

と言ふ趣旨の下に、日華滿三國の代表が各地で學術會議を開くにあつたが、此の會議に滿洲國を參加させるなど、言ふ事は中華民國側の絶対に同意し得ない所であるばかりでなく、特に中支では官民ともに日本人側と公式の會議を開く事を忌避する。と言ふのは名は學術會議であつてもそれが政治的の意圖に操られて、滿洲國承認の側面運動に利用せられたり、解釋せられたりする事を警戒もし、懸念もする必要が多分にあるからである。

その爲に井上主席代表は幾度となく今回の中國訪問が純工業的學術的に兩國の提携親善を計らうとする以外に、何等政治的の意味がない事を反覆し、その他の代表連も滿洲國など、言ふ言葉はおくびにも出さない様に互に警戒を拂つたものであるが、滿洲國の成立が日華兩國々交上の大きな難關として横はる以上、餘程の努力を拂ふのでない限りは局面の轉回は不可能である。その爲には籍すに相當の年月を以てしなければならぬのは勿論であるが、別して此の種の文化的會合を今後とも頻繁に開催して、兩國民の相互的理解を進める事が、兩國親善の爲の根本の要件でなければならぬ。此の意味に於て私



は今回の東洋工業會會が極めて有意義な企であつた事と、

又その意味に於て會議が相當の効果を收め得た事とを確信するのである。

上海會議

上海會議は中國側に之が文涉の衝に當る有力な團體がない事と、藍衣社系の妨害などがあつた爲に、その開催が極めて困難だつたが、わが石射總領事、中國側では外交部次長唐有壬氏らの異常なる盡力の結果、實業部々長陳公博氏から上海市長吳鐵城氏に對して會議斡旋の命令があり、辛うじて會議が成立したのであつた。

但し中國側では何處までも東洋工業會議と言ふものを認

めないで、一同を遇するに日本工政會代表團を以てし、午餐會の菜單にも

中華民國二十四年十月二十六日午宴

上海吳市長招待日本工政會代表團

などと印刷する始末であつた。尤も東洋工業會議を認めないのは獨り中支ばかりでなく、天津、北平でも同様であつて、到る所日本工政會代表團として取扱はれた事は注意すべき點かと思はれる。

十一月二十五日夕方上海の揚樹浦の郵船埠頭に上陸した一行はその脚で佛租界の總領事官邸に設けられた有吉大使の歓迎茶會に臨んだのであるが、その席にはわが主なる在留官民、中國側は吳上海市長始め市政府の要人が列席して、上陸第一日の交歓が行はれた。

上海會議は二十六、七の兩日に亘つて佛租界の中華學藝社で開催せられた。中華學藝社は日本留學生出身者の爲に設けられた會館で、その設立に對してはわが對支文化事業部から多額の資金が提供せられたと言ふ事である。會議第

一日は正午吳市長が代表一行の外、有吉大使始め主なる在留日本官民、中國側の大學教授、官吏その他を招待して午餐會を開き、食後別室で中國側では汪外交部々長、陳實業部々長、日本側では廣田外務大臣、町田商工大臣等の祝辭代讀があつた後に講演會を開く。第二日は同じ中華學藝社で井上主席代表の名で前日と同じ顔觸の連中を招待して午餐會を開き、食後同じく別室で講演會を開く……と言ふ變則的な形式の下に行はれ、講演者も兩日を通計して日本側二名、中國側一名と言ふ少數に限定せられたのは、學術會議としては如何にも物足りない。その理由は主として中國側の對抗意識によるもので、日本側には講演者も講演材料も相當豊富であるのに對して、中國側にはその用意が乏しい結果に基くものと察せられた。例へば中國側の講演者同濟大學教授唐英君は伯林のシャロツテンブルプの工科大学で土木工學を専攻したディプロマ・インデニヤアで、私は午餐の食卓で識合になつたが、その演題は「上海の工業」と題する、甚だ内容の空疎なものであつた。

さうした講演よりも午餐會席上に於ける吳市長の挨拶や汪外交部々長、陳實業部々長の祝辭の内容の方が、私には遙に興味深く聞かされた。吳市長は國民政府の中堅人物として最も複雑多岐なる國際都市上海の行政を掌理する偉丈夫であるが、その歡迎の辭の一節に曰く

『民族相提携すれば人類文化起り、民族相爭鬪すれば文化滅ぶ……』

私はそれを單なる外交的辭令としてとなく極めて意味深く聞いたのである。

上海の戦跡

昭和七年の上海事變は日華兩國民に取つて今猶ほ記憶に新たなる所であるが、事變の結果として共同租界の一角には新たにわが陸戰隊本部が設けられ、その堂々たる建物にも日華國交上の不穩なる底流が感ぜられる。

吳鐵城氏はあの事變の後半から蔣介石氏の信望を擔つて上海市長の職に着き、事變解決の衝に當つた人物であるだ

けに、その後我々一行が訪問面會した南京、青島、天津、北平などの各特別市の何れの市長と比べて見ても、一頭地を抜いた政治家肌、外交家肌の偉材である事が感ぜられた。江灣鎮、閘北、吳淞クリークなど、當時の新聞の報道で馴染の深い地方をドライブして見ても、爆彈や銃砲彈に破壊せられた二、三の廢屋が、僅に慘劇の名残を止めてゐるだけで、その他は殆ど全部が修理せられ、整理せられて戦禍の跡方もない。

折からの落日に棉花畑を耕す支那農民の影が長く地に曳く間を自動車を驅つて廟行鎮の戦跡を弔ふ。此處は所謂爆彈三勇士の壯烈なる戦死によつてわが國の小學兒童にまでその名を知られた戦場であるが、同時にそれはまた中國側に取つても十九路軍が善戰好防の武名を轟かした貴い戦跡として記念せられるのである。互に敵味方となつて戦ひはするものゝ愛する祖國の爲に甘んじて屍を戦場に晒すその祖國愛に對しては同様に深い敬意が表せられる。

廟行鎮の荒野には中國側の手によつて美しい花崗石の納

骨堂が建立せられ、その正面には

義薄雲天 林森（國民政府主席）

の題字があり、更に歐洲大戰後、佛蘭西や白耳義に建てられた無名戰士の墓に倣つて

無名英雄墓

奠基紀念 中華民國二十三年十一月吳鐵城

と鮮かに刻されてゐる。

その上に此の附近を廟行紀念村と名づけて模範農村を營む計畫が實施せられてゐるのを見ても、上海事變を契機とする中國々民の自覺運動の推移は注目し値するものがあるではないか。

大 上 海 市

上海は中華民國隨一の商工業都市、經濟都市であつて、現在政治の中心は國民政府の國都南京ではあるけれど、而も上海を無視しては南京は成立し得ない程の隠然たる勢力をその政治機構の上に乗せて及ぼしてゐる點から言つて、上

海は中國の心臓とも稱すべき大都會である。而もその中樞に當る部分は共同租界や佛租界に占められて、殆ど中國の主權が及ばない現狀にある事は、中國人の最も心外とする所でなければならぬ。

此の故に國民政府は數年前から完全に中國の主權の下に統制し得る大上海市建設の計畫を樹て、現在では殆ど全部外國人によつて占據せられてゐる楊樹浦埠頭とは別に、黃浦江下流左岸に新たに上海港を築造し、之を中心として大上海市を營まんとする諸般の工作が着々として具體化せられ、現に上海市政府、上海市教育局、同工務局などの堂々たる建物が市街豫定地の原つばの真中に屹立して居るのを見ても、その遠大なる計畫の一端が察知せられる。

その大上海市の建設事業を遂行する爲の工務局の局長沈怡君とは中華學藝社の午餐の食卓で識合になつたが、獨逸留學生出身で獨逸の工學博士の學位を持つてゐる、略々我々と同年配の土木技術者である。その外今度の旅行で識合になつた青島市工務局長刑契莘君、天津市工務局長楊豹瑩

君らが何れも壯年の土木技術者である事は、如何にも「青年支那」に適應しく、深い興味を感じしめた。

「新上海港修築計畫は沈怡君の立案する所に係り、その水深維持の問題に就ては窃に苦心をしてゐる様であつたが、同君は亦揚子江の治水及利水問題に就て多年研究を續けてゐるとかで、私に日本の河川の状態などを訊ねた後で『日本の河川は支那の河川とは全く趣が違ふ。米國のミシシッピーなどが揚子江に類似するかと思ふが……』など、話した。

『左様。然しミシシッピーを改修し得る米國の河川技術者が日本の富士川を改修する事は困難かも知れないが、逆に富士川を改修し得る日本の技術者は米國のミシシッピーを改修する事が出来る。例へば満……』

と言ひかけて私は口を噤んで矢庭に老酒の盃を取上げた。沈君は呆氣に取られた様な顔をしたが、それでも私と乾盃する爲にあはてゝ盃を取上げた。

それが支那の食卓の儀禮だつた。

蘇州

上海滞在の一日を割いて吳王夫差の古都蘇州の見物にゆく。上海から蘇州までは京滬線の汽車に乗つて二時間ばかりの行程であるが、その沿線は一望萬里の平野が展開してゐる間に縦横に通河が通じ、畑の間に灰色の帆が寛く動くのを見て、そこに水路のある事が領かれる様な悠久たる大觀が心から私を喜ばせた。

上海附近の景勝地としては蘇州と杭州とが並び稱せられる。一は張繼の『楓橋夜泊詩』――

月落烏啼霜滿天 江風漁火對愁眠

枯蘇城外寒山寺 夜半鐘聲到客船

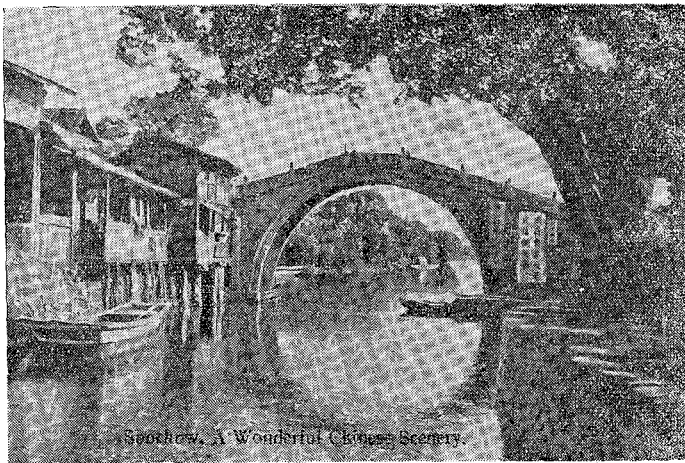
によつて知られる楓橋や寒山寺を中心とする名勝舊跡によつて、他は西湖を繞る明媚なる風光によつて、特にわが國の文人墨客の耳目に膾炙する所である。

時日の餘裕がないために杭州を見る機會のなかつた事は如何にも残念だつたが、蘇州の古い都を訪ねて、カニドロ

ムやハイヤライなどの競技の行はれる近代都市上海の夜など、は全く別個の趣のある古代支那の風物に接し得た事は誠に幸であつた。

蘇州城の内外を貫く大小無数の通河にも、昔から支那では『南船北馬』など、言はれた言葉の意味が成程と頷かれたが、有名な楓橋は鐵鈴關と呼ばれる城門の外にあつて、太湖に通ずる通河に架つてゐる古い様式の石のアーチだつた。橋面は階段状になつてゐるが、それに木製の軌道を取付けてその上を器用に車が通る……

蘇州の郊外では水牛が水田を耕してゐるのも南國らしい情景だつた。此の地方は又養蠶が盛んで、蘇州絹はその品質の優良



Suzhou, A Wonderful Chinese Scenery

蘇州風景

一四〇
な事によつて知られ、城内にある北寺の八階の塔から俯瞰した蘇州市街の美しさを見ても、その富裕さが窺はれたが、それよりも蘇州は美人の産地として昔から支那全土に知られてゐる。

現代の支那の若い女は殆ど全部が斷髮で、それを鰻で縮らせてゐる様に見受けられるが、あの身體にびつたり合つた鮮かな色彩の支那服を身に纏つた若い蘇州美人は、如何にも窈窕だとか楚々だとかと形容するに適應しい感じであつた。

城外の虎邱は蘇州隨一の名勝として知られ、その丘に登る途中には夫差の斬岩劍の遺跡があり、丘の上には土と瓦と石灰とで積上げられた廢塔がある。その半ば崩れて雜草の生え茂つた廢塔はそのま

ゝの状態で立流な藝術を構成するもので、何時までも私の懐古的な感傷を刺撃して已まなかつた。

首都 南京

その虎邱へ登つてから降りる迄、丘の上で晝食した時間を含めて殆ど二時間の間、二人の少女が後になり先になり我々の一行四人に纏はつて、麥桿細工の團扇の様なものを買付けようとして離れないのも支那の田舎らしい情景だつた。

その中の一人は別して愛くるしい顔をしてゐたが

『二枚、二十錢』

など、片言の日本語を使ふのが如何にも可憐だつた。誰かゝ椰楡つたりすると素早く二、三步身を退いては、又

『二枚、二十錢』

と迫つて来る。そして仕舞には

『四枚、二十錢』 『六枚、二十錢』

など、自分で競り落して、最後まで離れなかつたのは、矢張り支那の國民性の根強さを思はしめるものがあつた。

十月二十八日午後十一時京滬線の列車で上海を出發して翌日の午前七時南京に着く。南京では會議は開かないで國民政府を訪問して敬意を表するのが最初からのプログラムだつたので、新築の首都飯店(メトロポリタン・ホテル)で朝食を取つてから、午前中は實業部、交通部、南京市府などを歴訪し、午後は明孝陵、孫總理の陵墓の參拜や國民政府の首都としての新興南京市の見物に費し、その夜直ちに津浦線の列車に乗つて濟南に向ふと言ふ様な慌しさであつたが、此の南京訪問は今回の會議の行程中、最も有意義に使はれた一日だつたと言ひ得る。

南京は今首都建設の途上にあり。諸官衙の建築や街路の建設などが着々として營まれてゐるのは、中華民國勃興の氣運を反映するかに感じられた。中國革命の父孫中山の陵墓は南京郊外鍾山の麓にあつて石階を登る事百米を超え、その規模の雄大なことは支那古代の帝陵を遙に凌駕するも

のがあつた。

高さ千米ばかりの杭州大理石に

刻して

中國々民黨葬總理孫先生於此

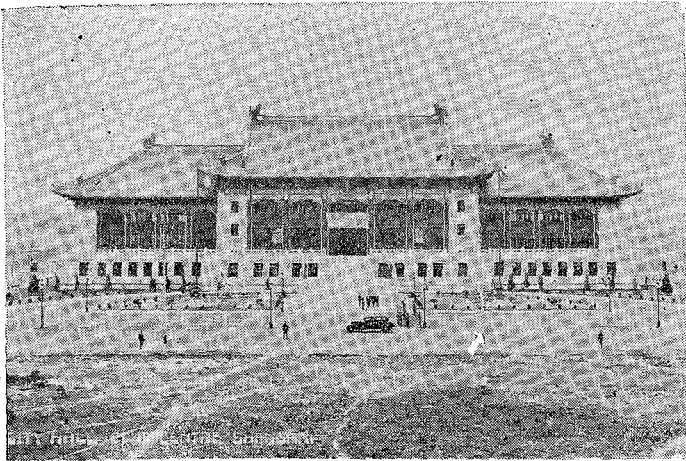
中華民國十八年六月一日

南京は菊花満開の季節だつた。

公園にも庭園にも、ホテルにも官廳にも黄白、色とりどりに咲き亂れた菊の花が馥郁たる香氣を放つ。中國人が菊を愛する事は遙に日本人に過ぎたるものがあり、諸官衙の玄關正面から應接室の内部にまで鉢植ゑの菊を所狭く配置した趣味性には坐ろなる床しさが感ぜられた。

國民政府は近年『新生活運動』

を起して中國々民の精神作興に全力を傾注し、青天白日旗



建築に則つてゐる、その貴い強烈なる國民的意識であつた。

と蔣介石氏の肖像とを入れた下に

人生以服務爲目的

遵守紀律 服從命令

などの文字を印刷したポスターを到る處に貼布し、或は歩きながら物を食べるなどとか、往來で煙草を吸ふなどとかの、所謂新生活の要項を掲げてあるが、南京は流石にその運動の根源であるだけに、新生活の規律が最も嚴格に履行せられてゐるかに見受けられた。

上海市政府

特に建設途上にある大上海、新南京を展望して私の注意を惹いた事は市政府や中央官廳の新建築が材料は鐵筋コンクリートでありながらその様式や裝飾は全く支那古來の宮殿式

之に比べるとわが國の官廳建築が滔々として西洋建築の模倣に甘んずる現状は之を何と評すべきかを知らない。

國民政府

南京に於ける國民政府の一行の歡迎振りは全く我々の夢想でもない所だつた。一行の案内兼接待役として實業部、外交部、交通部、市政府の科長、參事らが自ら之に當り、一行が此等の官衙を訪問した時には部長や市長が親しく之を迎へて懇篤なる歡迎の辭を述べた。特に朱交通部長の如きは中國の郵便、電信、電話、航空その他交通部所管事項に就て具さに説明を加へると同時に將來の抱負を語り

『特に簡易保險、郵便年金の如きも貴國に於て發達せる制度に倣つて中國にも之を實施したい希望を有するから幸にして指導を與へられたい。』

と言ふ様な誠意のある挨拶を述べた。

午後五時半から六時半までは行政院長汪精衛氏が外交部々長の資格で一行を外交部の茶會に招待した。

十月二十九日茶叙候

光 汪兆銘謹訂

地點 外交部

時間 五時半至六時半

之がその招待狀の文面だつた。『候光』は光來を待つ意である。汪部長の歡迎演説は非常に丁寧な、そして熱のある調子で、日華兩國親善の必要とその可能性とを力説したので、席に連なつた多數の彼我兩國人を感動せしめるに充分だつた。後二日にして汪氏が兇漢に狙撃せられたのは此の日の親日演説が禍をなしたのではないかとさへ取沙汰せられたのも決して偶然ではない。

その夜八時から首都飯店で外交、實業、交通の三部及び南京市主催の一行歡迎晚餐會が開かれて、陳(公博)實業部長、馬(超俊)南京市長、唐外交部次長を始め各部の次長、司長、科長ら無量百名がその席に連なり、オーケストラが邦曲『春雨』や『越後獅子』を奏する間にシャンパンの杯が擧げられる……

唐有王氏は慶應理財科の出身であるが、私は食後、氏に南京政府の機構の事を訊ねたり、日本留學生の事を話したりしたが、氏は私を見て

『貴方は大使館の堀内さん……堀内書記官に似てますね。』
など、流暢な日本語で話すのだった。

國民政府の今日の様な歡待振りは全く空前の事例で、有吉大使新任の時でさへ之だけの歡迎は行はれなかつたとはいへない。總領事館員の驚嘆して語る所であつたが、此の種の文化的提携運動が如何に中國國民及び政府要路の翹望歡迎する所であるかは之によつても容易に洞察し得る事を私は確信するのである。

それを思へばその後一行が天津や北平を訪問した時の會議の會場であり、そこに駭蕩たる親睦の空氣が醗酵せられた南開大學、清華大學、北平大學の學生をして抗日示威運動に狂奔するに至らしめた原因に關して、わが國民は自ら深く省察しなければなるまい。(未完)

鴨川未曾有の大洪水と舊都復興計畫

京都府では本年六月二十九日に突發して京都市民を驚かした市街を縦斷して居る鴨川の大洪水は未曾有のもので、同府測候所開設以來の最高レコードであつて其の被害も意想外に出たので府當局では其日の降雨狀況、急激なる出水狀況、水防の狀況、被害狀況等を調査し京都市の國家的重要性即ち桓武天皇御奠都から明治二年三月東京に遷都ありし迄千百有餘年間の王城の地として、又歴史の都として無限なる史蹟國寶の上から我國史上の最重要の地位にあるのみでなく皇室典範に此地に於て御即位の大禮及大嘗祭を行はせらるる旨を定められたのであつて東京と相並びたる帝都と稱すべき地である。

故に美術の精、産業の華、宗教の淵源等の集中地として且つは國際的觀光都市として再々這次の如き水魔の來襲を見るが如きことなからしむべきものであるとし國家的事業として鴨川の根本的改修を主張する處がある。

寔に適切なる主張である。